

魚類調査から垣間見た外来魚の生態

ばてじゃこトラスト・琵琶湖博物館「うおの会」 中村 聡一

生息魚類が把握されている淡水面は限られている。日本最大の湖である琵琶湖を擁する滋賀県では、滋賀県水産試験場が古くから魚類分布調査を琵琶湖とその周辺の河川を対象として行ってきた。しかし、その広さ故に、漁業者が古くから区別していたのに分類に漏れていたもの（ナマズ3種など）があったり、正確な分布状況が把握されてきたとは言い難い。また、水産試験場の調査は主に主要河川などに調査点を設けたもので、面的調査と呼べるものではなかった。

1997年から、淡海淡水魚研究会・うおの会・琵琶湖お魚ネットワークが行った調査では、対象を小河川や網の目に張り巡らされた水路にも広げ、より詳しい分布の把握を目指している。ところで、WWF（世界野生生物保護基金）が全世界で「グローバル200」として選定した代表的かつ重要な自然環境の一つとして琵琶湖が選ばれ、2004年9月から「WWF・ブリヂストンびわ湖生命（いのち）の水プロジェクト」をWWFジャパンとブリヂストンが共同でスタートさせたのをきっかけにその調査のスピードは加速された。

1997年から2003年までの調査での調査地点数は2,703で、琵琶湖岸から用水路、河川、ため池などかなりの範囲を網羅しているが、主な外来魚の出現例数はブルーギル364、オオクチバス315、ヌマチチブ274、タイリクバラタナゴ151、オヤニラミ22、カダヤシ19、ジルティラピア14であった。最も多く出現したトウヨシノボリは1,084例（988地点；36.6%）であった。

その後の調査のうち、2005年11月までの一部、上級編の調査票回収分1,249のうちでは、ブルーギル40、オオクチバス49、ヌマチチブ45、タイリクバラタナゴ23、オヤニラミ8、カダヤシ3、ティラピア6であった。トウヨシノボリは504（40.4%）であった。演者が関わったのはこの調査からで、上記の1997～2003調査でバス・ギルがそれぞれ10%以上出現していたが、上級編調査票回収分では4%以下であった。これは、前者が湖岸も含めて中下流域に調査点が相対的に多かったのに対して、後者がその調査の補完的な意味合いを含んでいたため、より微細な用水路などや上流部に重点をおいた格好になったため、止水を好み、生態学的地位が高いバス・ギルの出現が相対的に少なかったのであろう。

その過程で、止水を好むはずのバス・ギルが流れのある河川や用水路で恒常的にみられるところや、上流の水系に産卵場が考えられないような流れのある河川でバス・ギルの稚魚・未成魚がみられたことがあった。用水路の水位維持用の一枚の水門があるだけでバス・ギルが全く進入していない地域がある一方、一見、人為的に導入しても定着しそうにない、早瀬で区切られたような河川での採集例があった。

下流域では梅雨時などの多雨時における琵琶湖の水位の上昇と、河川・用水路の流量・流速の増大・水位の上昇から、普段、バス・ギルにとってバリアとなっていた堰や水門でのオーバーフローや、浅く流れが速い瀬が均一な流れになったりすることから、積極的な向流性はみられないであろう種であるが、とくに自然の岸辺が残る河川ではヘチ沿いに上がるというより分布を広げるという移動をしている可能性が大きいと考える。

バス・ギルに次ぐ出現数を示す外来魚は国内外来魚のヌマチチブであるが、競合するヨシノボリ類に比べ現在まだ少なく、大きな影響は出ていないように思える。しかし、ヨシノボリ類の少ない湖岸の「整備された」石積み護岸に多数生息していることなどから、空いたニッチにもぐり込んで、確実に増え生息域を広げている。

タイリクバラタナゴは亜種であるニッポンバラタナゴを駆逐することから侵略的外来種ワースト100に指定されている。ただ、本種が他のタナゴ類と競合している印象は薄く、止水では本種が、流水ではアブラボテ、ヤリタナゴが優位に立ち、琵琶湖とつながる水域ではカネヒラが多くみられる。